

満つる位です。

限りある世界に限りある食物を食ふて生長するものが、斯く大數が生存してはとて一日の日も覺束ない、そこで強者が弱者を凌ぎ、大は小を合すといふ生存競争が起るのであります。だから若しも周圍のありさまと少しも似てゐない形や色彩をしてゐたら、強いものが見付けると直ぐ食つてしまいますそこで、皆外界の事狀に適應しえうと勉めるのです。

全体熱帶地方は四時樹木青々として、いろ／＼の花が咲き綻び丹青を盡して居ります。ですからそこにすむ鳥類も自ら其体色をそれらの色彩に似せねばなりません。それで赤や青を取り交せて美しい色をしてゐるのです。

これが即ち自然淘汰の原理としては熱帶地方の鳥

類のうつくしい理由です。

話が随分他へ轉じましたがこれから後へもどつて肝心の話に入りませう。さて此次から申しますのは矢張奇妙な動物でありまして暫時昆虫の方に話を向けませう。これは次號に譲つて今回はこれだけ。

珠鷄の話

在三河安城 久永達倫

編輯の切日の切迫に近き、俄の思ひ立ちに『珠鷄の話』をものして、貴紙の餘白を借らん。

米國のポトリ、イガジン、Poultry Magazine. (家禽雜誌) から譯して書こう。

珠鷄とは漢名なので、英語はギユニアホール Guinea Fowl. と云ふので、女子供にわかる様に言

ふならばホロホロ鳥といふたらよかるう。

で、此鳥の原産地は、亞弗利加洲なので、殊に同洲の東西部の海岸に澤山産するのであるが、現今は、歐洲各國到る處で蕃殖しない地は殆ど無いようになつた。

頭に角のやうな堅い冠を戴き、その色は淡灰色で、冠の下の方から嘴の上の方までは赤色、そして赤肉髯も同じく赤色、顔部と耳朶は含藍白色とも言ふて宜らう、頸上に極小さい反毛がある。體は一寸見た所では、鶉に似てゐる羽毛は頸羽ばかり灰白色で、他は皆含紫淡灰色である。全体は先づ淡紅褐色、嘴は灰黒色である。

他の鳥に比して、産卵の多いのには實に驚く、

殆一日も怠らぬと言ふてよい位である。或養鶏家の實驗によれば、僅々五ヶ月間に百五六十個産卵を得ること難きにあらずと聞いたが、是を以て見ると此鳥の頗る貴重であるといふ事がわかる。

孵化期は、五月下旬頃が一番よいので、雛の發生する日数は、先づ抱卵してから、通例二十五六日、大抵早くも二十七日をそきは二十八九日位經過せねば、中々發生しない (まだある)